

越前 敦賀 『けいせい反魂香』の舞台

(福井県敦賀市)

敦賀市は、浄瑠璃『けいせい反魂香』の舞台となったまちです。

「…天満天神の告げありて、越前ノ国氣比の浦へと旅羽織…」主人公狩野元信が、松を描くために敦賀の浜にやってくるころから話が始まります。

敦賀市は、古来より敦賀港を中心に日本海側諸国の玄関口として栄えてきました。

市街中心部にある緑に包まれた氣比神宮と、その大鳥居の素晴らしさは実に見事です。大宝二年(七〇二)の建立と伝えられる氣比神宮は、仲哀天皇をはじめ七柱の祭



敦賀市街

神を祀る北陸道の総鎮守です。高さ一一メートルの大鳥居は、木造としては春日かすが大社たいしや（奈良）、厳島神社いつくしまじんじや（広島）と並ぶ日本三大鳥居の一つで、荘厳な境内は越前一の宮としての風格が漂います。また、かつてここを参拝した松尾芭蕉まつおばしやうの像と句碑も残っています。

商店街から少し行くと、気比の松原があります。白砂青松の松原は訪れる人にやすらぎを与え、夏は松原海水浴場として、県内外からの多くの海水浴客で賑います。

京の都からは比較的近い気比の松原ですが、近松が数ある松原の中から敦賀の地を選んだのはどうしてでしょうか。気比の松原は、三保みほの松原（静岡県清水市）・虹の松原（佐賀県唐津市）と並び日本三大松原の一つで、当時の京・大坂にもその



氣比神宮



氣比の松原

名は知られていたはず。さらに、近松が鯖江から京へ移るとき、この敦賀の地を通っていたとすれば、初めて見る大海原、白砂の海岸、限りなく続く松原は、多感な少年の心に強く焼きつけられたに違いありません。

また、松といえは、『曾根崎心中』の末尾、

「松、棕櫚しゆろの一木ひときの相生あいおい」に体を結びつけ、

徳兵衛とお初がこの世に別れを告げる場面はあまりにも有名です。